



雪道

足元注意

単身生活の老後の時代に突入

それは若者も含めた全世代の課題

総務省が実施をした2020年の国勢調査によれば、単身世帯は前回の2015年の調査より4.8%の増加であり、その世帯数は2115万余、全世帯の38.1%を占める。あと数年で単身世帯の実数は40%を超えるだろう。さらに65歳以上に限ってみれば、男性は230万人余、そして女性は441万人が「一人世帯」となる。そのことは女性が男性よりはるかに長命であり、女性の一人世帯の長い老後の生活を意味する。

加えて、高齢者の居住場所である老人ホームなどの施設の収容能力は179万8千人であり、病院のそれは40万人という調査結果がある。

注目すべきはその増減である。施設入居者は10年前と比べて60万人ほど増えている一方で、病院入院者は4.7万人ほど減っている。

高齢者の数が増え続ける一方で、施設や病院の数が不足し、それに追い打ちをかけるように、新型コロナウイルス感染の急増は、施設への入所や病院への入院が難しくなっている。

困難になっている自宅での老後の生活

そこで老後は「自宅生活」となるのだが、その単身世帯を誰が支えるのだろうか。市町村が介護認定する場合その審査で欠かせないものに治

療にあたってきた主治医の意見書がある。

その医学的な意見書は、患者の症状の安定性、心身の状態、生活機能など医療、介護のサービースに関する情報となる。そのようなこともあって、患者が退院するにあたっては主治医がその家族と面談し、退院後のケアの主たる家族は誰かと言ったことなどが話し合われる。しかし、その場に集まった家族が親の介護の引き受けに難儀をする光景を目にすることが多々あるとの主治医の報告がある。各々が家族を持ち、将来の生活設計を持っている。そのことを守り、覆されることへの悩みと抵抗がそのような悲しい事例を生み出しているのだろう。

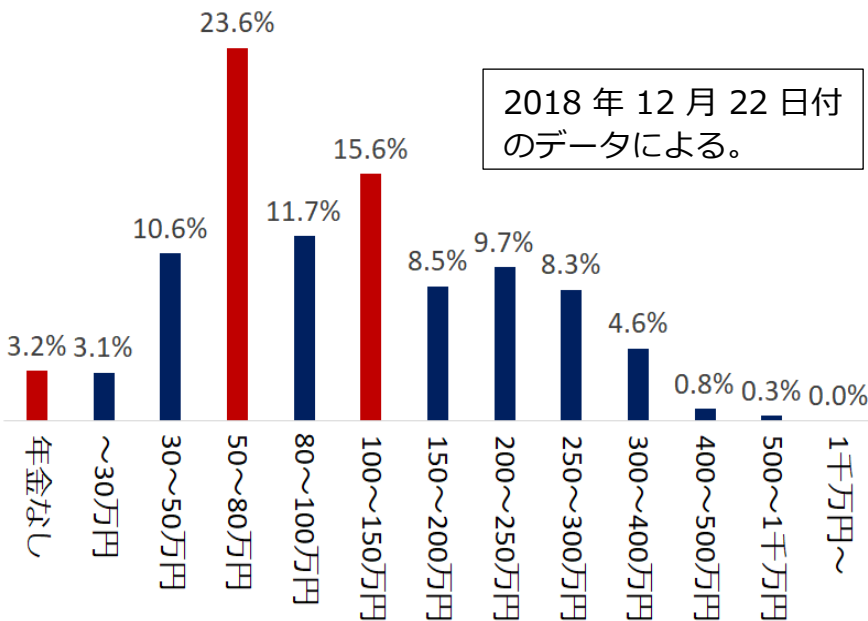
そして今、「訪問介護」が消滅をしようとしている。なり手がいないのである。

年金の金額は「50〜80万円」の人が多い

そして単身生活者を支えるものに年金がある。日本が経済低迷期に入った1991年。団塊の世代は40代前半を迎えた。そして子どもの教育費、住宅ローンなど家計の負担が大きな中で「賃金は増え続ける」という常識が崩れ、団塊の世代の人たちは60歳の定年を迎えた。

二〇二二後期高齢者が受け取っている年金の分布がある。若干古いが参考にしてほしい。無年金者の割合は少ないが、しかし、実際に受けとっている

後期高齢者が受け取っている年金の分布



金額で一番多いのは「50〜80万円」である。その皆さんは国民年金のみの加入者で、満額かそれに近い金額を受け取っている人であり、女性が多いことを予測する。次に多いのが「100〜150万円」であり、10〜15年ぐらい厚生年金に加入していた人で何らかの理由で退職をした人であろう。

老後の問題を論じるとき、必ずそれは高齢者の問題だと述べる。しかし、「単身生活」の長い老後を考える時、高齢者だけの問題に特化できないことは明らかである。若者も含めた全世代の問題として考えるべきであることを提案したい。

(文責・降矢)

気づいたこと、感じたこと

国内の米軍基地からの感染拡大に怒りを

人類の歴史の中でしばしば体験をしてきた「感染症」の厳しさ、恐ろしさは消えることはない。ここに、若干古い記事であるが、次の毎日新聞の「余禄」(12月28日)がある。

「わが国の軍服に身を包んだ何百という若く屈強な兵士がかたまつて病棟に来る。『顔は青みがかかつて、痛ましいほどせきがでて血痰を吐く』、スペイン風邪流行時の米軍基地の光景だ。第一次世界大戦への米国の参戦による米軍の移動は、またたく間に感染を欧州と米国内に広げた。新型コロナとやや違うのは、流行が若い人々の命を容赦なく奪ったことにある。そんな歴史的経験のある米軍でありながら、オミクロン株の感染拡大に世界が緊張する中、沖縄の米軍基地で大規模なクラスターが発生した。日本に向かう海兵隊の出發、そして入国した時点でも検査をしていないという。自治体の外出禁止の要請にもかかわらず、酒気帯び運転で逮捕される米兵が出る始末。しかも、在日米軍は感染の情報を明かさないと。」

わが国の「主権」はどうなっているのか。

直近になって、米軍関係者の「不要・不急」の外出制限がとられたようだが、沖縄、山口、広島の感染拡大の要因が「米軍基地からの染み出し」であることは明らかになっている。「遅すぎた」その責任は、日本国政府にもあ

ることを私たちは知るべきであろう。

長く続く一本道

道の両側に田園が広がっている。ここは猪苗代湖から奥羽山脈を越えて水を引いた安積疎水の恵みを受け開拓された地域である。今は簡易舗装となっているが、40年前は農耕馬が通り、ところどころに馬糞があり田植え時には多くの皆さんで賑あう道路でもあった。この一本の道にも「長い、いろいろな歴史」が込められている。



その「長く続く一本道」は、コロナ禍にあつて、ともすると運動不足になる私にとつては格好の散歩道になっている。しかし、その習慣も寒波続きの毎日である。いろいろと言いつけてサボることも多い。そして椅子に座る時間が多くなるに比例して、足、腰の痛みが強まる。

そこへ一人の友人の年賀状を頂く。

「花見山の梅サンシュユ、三春の滝桜、観音寺川の桜、白河の関のカタクリ、牡丹園、香りのバラ園、浄土平の lindow、秋の安達太良、裏磐梯、甲子高原、観音沼、塔のへつり、南湖公園の紅葉と、『密』にならないところで花や景色を楽しむことができました」としたためられていた。

全てが、私の脳裏に刻みこまれて光景であ

る。運転免許を返納してから5年がたつ。行動範囲も狭まった。というよりは広げることがもはやできない。私にとって「蜜」にならないひと時の行動。それがこの「長く続く一本道」である。

元氣をもらった我が家の年末年始のひと時

我が家の年末年始は、3人の子どもの連れ合いと、連れ合い候補も含めて、11人の大人数で大晦日の晚餐。会津では紅い魚(鮭)を食べる。つゆはおひら、おかずは黒豆、イカ人参、なます等など、そして「ささまさまむね」の純米吟醸酒で懇親を深める。そして長男家族は、長男の連れ合いの実家に。元旦は蕎麦、これを食べて次女夫婦と連れ合い候補は帰って行きました。二日は伝統を継承して次の世代にも伝えた次第です。2022年、私達高齢者3人は元氣をもらつて楽しいスタートとなりました。

ウイルスを家庭内に持ちこまないために

13日に開かれた東京都の会議では、直近1週間の感染者のうち、経路が判明している中では、家庭内感染が49%と最も高いことが明らかになったと報じられている。これは全国的な傾向であろう。家庭内にウイルスを持ち込まない。そのために実践している報告があるので紹介したい。

- ① 上着、ズボンは玄関で脱ぎ、除菌液を噴霧する。バックも同様にする。マスクは捨てる。
- ② 手洗いの後、買い物も含めて外部から持ちこむものはすべて除菌液を噴霧した布で表面を拭く。裸の野菜類などは二日ほど放置しておき料理の前にはよく洗う。
- ③ 玄関の外・内の「ドアノブ」を除菌布で拭く。

宿泊療養施設・1108室の確保

この間、OB・Gニュースを通して宿泊療養施設の増設を求めてきました。そして1月号では医療従事者でもある「清田明宏氏」の自らの療養生活の報告を掲載しました。

そして今般の「オミクロン株」の爆発的な拡大を防ぐため、県は「宿泊療養施設」の増設を図った。よって、あらためて福島県が作成をした「宿泊療養のしおり」と、県内で確保されている「宿泊療養施設」の報告をいたします。

療養期間の考え方（宿泊療養のしおりより）

本県の宿泊療養施設では、科学的根拠に基づき、検体採取日から10日間のうち、最後の3日間に咳や発熱などの症状がない場合は療養終了とする。ただし、最後の3日間に、咳や発熱等の症状がある場合は安心して療養を終えていただくため、療養者の皆様と医師が相談して療養を延長する場合があります。

宿泊療養施設505室を上積み

追加の二施設は福島市・南相馬市

福島県は、新型コロナウイルスの新変異株「オミクロン株」の流行に備え、医療提供体制を強化する。宿泊療養施設2カ所を新たに確保したほか、既存施設で運用方法を見直し、現状の603室から505室増の1108室に増やす。ワクチンの追加接種に向けた大規模接種の実施についても市町村と検討に入った。14日の県感染症対策本部の会議で新たに確保したのは次の施設である。福島市の東横イン福島駅東口2（181室）と、南相馬市の「ホテルサンエイ南相馬」（115室）。

福島市は2月上旬、南相馬市は今月下旬の開所を見込む。相双地区での施設運用は初めてとなる。県は早期開所に向け、施設整備やスタッフの配置など準備を進めている。既存施設では、患者が退所した後の消毒をフロア単位から部屋単位に見直し、稼働率を向上させる。これにより、県内の宿泊療養体制は、福島市が2施設397室、郡山市が3施設384室、いわき市が2施設188室、会津若松市1施設24室、南相馬市1施設115室となる。

1月15日（福島民報）より

宿泊療養施設の確保状況

所在地	確保済み	追加分	稼働率向上分	合計
福島	160室	181室	56室	397室（2施設）
郡山	293室		91室	384室（3施設）
いわき	126室		62室	188室（2施設）
若松	24室			24室（1施設）
南相馬		115室		115室（1施設）
合計	603室	296室	209室	1.108室（9施設）

【提言の広場】



■大晦日〜元日の寒波そして大雪嫌な予感を感じますが過去の正月では当たり前だった気がしますが寒いより暖かい方に慣れすぎで大変さが身に沁みます。黨員の方の「老人介護」の記事大変ですね。小生の母が一昨年暮れの28日に99才で他界しました事を思い出しましたが最後の1年は介護施設にお世話になりましたがデイ、&シヨートの送迎ヘルパーさんとの在宅介護大変でした何れ自分たちもお世話になる身ですから他人事とは言えません。今夏の「参院選」野党の結束で高齢者、弱者、生活維持向上対策等問題山積です。是非頑張つて勝利しましょう。

■こうした地道な活動が、社民党を支え、昨年の衆院選においても事前予想を上回る票数を全国で出すことが出来たのだと確信致します。今年には文字通り正念場、参院選の勝利と壊憲阻止に向けて頑張りましょう！

■いつもながらの、にニュースの発行継続ご苦労様です。いったん下火になったコロナ感染が急激に拡大し蔓延していますので、健康に注意して頑張りますよ。

■今年には参院選、県議選があり、憲法を護る要の年です。昨年の総選挙後に与党や改憲政党とマスコミは「野党統一候補は失敗。」と盛んに言っていました。野党統一候補の追求は正しいもので、マスコミ等の世論操作は政権与党や改憲勢力の危機感の現れと捉えることが肝要と思います。今年には野党統一候補をさらに強化し、改憲勢力

の力を弱めなければならぬと思います。共に頑張りましょう。

■7月の参議院選挙は、先の衆議院選挙の総括からその取り組みを始めなければと思います。社民党が、党の「生き残りをかけた取り組み」と強調することは、それで党内はいいとしても、国民に、なかならず社民党に高い支持率を示している高齢者に対する呼びかけを、しっかりと訴えるべきことを分かりやすく、手短にまとめることを望みたいと思います。野党共闘については、この機に及んで、連合の圧力に負けるようなことになるかと国民から突き放されるのではないのでしょうか。野党が戦うのは、自・公政権であることを忘れないでほしいと思います。社民党もそうしたことを踏まえて野党共闘を進めてほしいと思います。参議院選挙で自・公、そして維新も含めた改憲勢力が3分の2を占めれば憲法は危ないことになります。護憲、なかならず9条をめぐる改憲がぐつと近づくとことになるでしょう。「いざ戦わん」の決意はだれにも負けないつもりですが、よる年波を跳ね飛ばす力と、継続して行動できる「体力」は残念ながら底をついてきたようですが、体と相談しながら頑張りたいと思います。また、妻も心臓弁の取り換え手術を行い、退院後の検査と診断では、医師から「経過は順調です」との説明を受けました。後は様子を見つつ、体力の回復に向けた取り組みをしていくことになりそうです。おかげで食事を作ることをこの年になって少し覚えることができたこと、そして妻が喜んでくれたことが一番の収穫でした。おかげで手先は、ひび割

れと乾燥で手がさがさに荒れました。いい経験でした。

■先日、朝のTVのワイドショーで若いコメンテーターが「ずっと自己責任が基本だと教わってきた」という趣旨の発言をしていました。以前から、なぜ若い人が自民党を支持するんだらう？となかなか理解できないでいましたが、一つの背景を聞いた気がしました。「夢を見つけない、活躍の場を作りなさい、成功はあなたの努力次第、うまくいかないのはあなたの自己責任、誰も助けてはくれない」と物心ついてからずっとそう教えられてくれば「困窮しても社会が助けてくれる、政治が自分のために何かしてくれる」とは考えないのかもしれませんが。当然、政治には興味を持たず「現状をかき乱すことはやめてくれ」という思いが、政治の大きな動きを望まず、消極的な現状維持、消極的な自民党支持につながるのかもしれない。岸田首相は新しい資本主義、行き過ぎた新自由主義の修正と言います。12月に発表された10枚もののプレゼン資料も読んで見ましたが、内容がなく、再配分を若干見直すことで、アベノミクスの微修正を図っているだけに見えませんか。17日の施政方針演説でも具体的な方策は見えませんが、そもそも具体策のベースになる政治の理念が語られていないことが限界を物語っているように思えます。まずは格差拡大に歯止めがかけられるかが岸田政権の本気度を測る物差しだと思います。



【特別報告】

県内のみならず多くの方に「OB・Gニュース」をメールまたは郵送で配信をしています。そして「ニュースを読んで」（現在は提言の広場）のコーナーに毎回送信をして下さった方が昨年12月に急逝されました。匿名掲載を希望されていましたが、改めて次に紹介をしたいと思います。

名前 外岡秀俊さん(ジャーリスト)

経歴 1953年生まれ

1977年朝日新聞社に入社。

ヨーロッパ総局長を経て、東京本社編集長。退職後、震災報道、沖縄報道

にかかわり、原発避難者の仮設住宅

訪問などでしばしば福島を訪れる。

享年68歳 多くのご提言

ありがとうございます。

直近の提言 ニュース21年10月号・2ページ

寄稿「離れられないもの」

ニュース1月号・3ページ・中段

「共感型の運動」

読者の皆さんからのカンパに感謝

郡山地区の会は、運委委員による自宅配布を継続している。そこで会費を徴収するのであるが、「苦労様の労いの言葉と、そしてカンパを頂くことがある。また遠方より送られても来る。「継続は力」ということを学んできたが、有難い励みとなっていることを報告したい。ありがとうございます。(降矢記)